

野々市市

二日市イシバチ遺跡

2012

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

ふつ か いち
二日市イシバチ遺跡

2012

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は二日市イシバチ遺跡の発掘報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県野々市市（旧石川郡野々市町、平成23年11月11日に市制施行）二日市町地内である。
- 3 調査原因は二級河川安原川広域河川改修事業であり、同事業を所管する石川県土木部河川課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成19（2007）年度から平成23（2011）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部河川課が負担した。
- 6 現地調査は平成19年度及び平成20年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。
 - (1) 第1次調査
 - 期 間 平成19年11月7日～平成20年1月21日
 - 面 積 700㎡
 - 担当課 調査部調査第2課
 - 担当者 安 英樹（専門員）、立原秀明（専門員）、安中哲徳（主任主事）、山下陽介（嘱託調査員）
 - (2) 第2次調査
 - 期 間 平成20年10月14日～同年12月19日
 - 面 積 1,150㎡
 - 担当課 調査部調査第2課
 - 担当者 立原秀明（専門員）、中泉絵美子（嘱託調査員）
- 7 出土品整理は、平成21年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 8 報告書原稿作成は平成22年度に調査部特定事業調査グループが実施し、米澤義光（特定事業調査グループリーダー）が担当した。
- 9 報告書刊行は平成23年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 10 調査には下記の機関の協力を得た。

石川県土木部河川課安原・高橋川工事事務所、野々市市教育委員会、野々市市西北部土地区画整理組合
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図と写真、観察表が符号する。

目 次

第1章 経 過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果	6
第1節 調査の方法	6
第2節 基本土層	6
第3節 検出遺構と遺物	6
第4章 総 括	23

挿図目次

第1図	調査区位置図	3	第10図	平成20年度調査区堅穴建物遺構図	14
第2図	遺跡の位置	4	第11図	平成20年度調査区掘立柱建物 ・土坑等実測図	15
第3図	遺跡位置図	5	第12図	出土遺物実測図1	18
第4図	平成19・20年度調査区合成図	8	第13図	出土遺物実測図2	19
第5図	平成19年度調査区全体図	9	第14図	出土遺物実測図3	20
第6図	平成19年度調査区1全体図	10	第15図	出土遺物実測図4	21
第7図	平成19年度調査区遺構図1	11	第16図	出土遺物実測図5	22
第8図	平成19年度調査区遺構図2	12	第17図	出土遺物実測図6	23
第9図	平成20年度調査区全体図・溝土層図	13			

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	5	第3表	出土遺物観察表2	25
第2表	出土遺物観察表1	24			

図版目次

図版1	平成19年度調査1	図版5	平成20年度調査2
図版2	平成19年度調査2	図版6	出土遺物1
図版3	平成19年度調査3	図版7	出土遺物2
図版4	平成19年度調査4・平成20年度調査1		

参考文献

- 吉田 淳・横山貴広ほか 1989 『押野タチナカ・押野大塚遺跡』 石川県野々市町教育委員会
- 垣内光次郎 1990 『加賀窯の生産構造と製品流通』 『中世北陸の在地窯-生産と流通の諸問題-』 北陸中世土器研究会
- 吉田 淳・横山貴広 2001 『御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群』 石川県野々市町教育委員会・野々市町御経塚第二土地区画整理組合
- 堀 大介 2002 『附論〈論考〉古墳成立期の土器編年-北陸南西部を中心に-』 『朝日山』 朝日町教育委員会
- 田嶋明人 2007 『法仏式と月影式』 『石川県埋蔵文化財情報』 第18号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 宮川勝次 2007 『三日市A遺跡』 『石川県埋蔵文化財情報』 第17号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 安 英樹 2008 『二日市イシバチ遺跡』 『石川県埋蔵文化財情報』 第20号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 安中哲徳 2008 『三日市A遺跡』 『石川県埋蔵文化財情報』 第19号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 徳野裕子 2009 『徳用カヤダ遺跡1』 石川県野々市町教育委員会・野々市町北西部土地区画整理組合
- 中泉絵美子 2009 『二日市イシバチ遺跡』 『石川県埋蔵文化財情報』 第22号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 大西 顕 2010 『横江D遺跡』 『石川県埋蔵文化財情報』 第24号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 木田 清 2010 『弥生土器の表面観察からわかる土器製作過程の変化と、法仏、月影式の土器編年』 『石川考古学研究会会誌』 第53号 石川考古学研究会
- 西田昌弘・林 大智 2010 『白山市・野々市町徳丸ジョウジャダ遺跡』 (財)石川県埋蔵文化財センター

第1章 経 過

第1節 調査に至る経緯

二日市イシバチ遺跡の調査は、二級河川安原川広域河川改修事業に係るものである。事業は石川郡野々市町（本章においては全て当時の呼称による、平成23年11月11日より野々市市）二日市町・三日市町周辺において新規河道掘削工事を行うものである。石川県教育委員会文化財課では毎年、関係部局に対し次年度実施予定事業の把握を行っているが、本事業についても平成18年1月30日の「平成18年度埋蔵文化財調査等に関する協議会」にともなう開発部局への照会により知られたものもある。

新規河道掘削工事箇所は野々市町北西部土地区画整理事業区域内であり、町教育委員会が事業区域65.4ha内を平成11年9月27日～同年10月19日に分布調査している。その結果、以前より存在が確認されていた二日市イシバチ遺跡、三日市A遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤタ遺跡の5遺跡の遺跡範囲が確定し、同年10月28日付け文書で町教育委員会教育長から町産業建設部長宛に5遺跡存在の回答がなされた。これを受けて町教育委員会、町都市計画課、土地区画整理組合が、遺跡範囲内の道路等建設工事部分と十分な保護層が確保できない部分の調査を行うことで合意した。平成12年4月13日付けで町教育委員会と北西部土地区画整理組合との間で、土地区画整理事業地内における埋蔵文化財調査の協定書が交わされ、平成13年度から町教育委員会が発掘調査を開始している。

区画整理事業地内で行われる安原川河川改修事業について県文化財課では、区画整理にかかる発掘調査を町教育委員会が既に実施していたことから、発掘調査の合理性や埋蔵文化財の保護・活用等の観点から、町教育委員会が調査実施することが望ましいと考えていた。これに対し、町教育委員会と土地区画整理組合では、河川改修事業が県事業であることから、本事業にかかる二日市イシバチ遺跡および三日市A遺跡の発掘調査については県が実施すると考えていた。両遺跡の取り扱いについては平成18年1月31日に行われ、町教育委員会においては他の区画整理や開発行為に伴う発掘調査が多く、県事業にかかる遺跡調査の実施は困難である旨説明。協議の結果、二日市イシバチ遺跡、三日市A遺跡の発掘調査は県教育委員会が実施することになった。その後県教育委員会文化財課は県土木部河川課と調整を進めた。二日市イシバチ遺跡については、県土木部河川課からの依頼を受けた県教育委員会からの委託事業として、財団法人石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。現地調査は平成19・20年度に、出土品整理・報告書刊行作業は平成21～23年度に実施した。

第2節 発掘作業の経過

平成19年度に700㎡の、平成20年度に1,150㎡の調査を実施した。

（平成19年度）

①調査体制

調査期間 平成19年11月7日～平成20年1月21日

調査主体 財団法人石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）

総 括 前田 憲治（専務理事）

事 務 山下 淳映（事務局長）

総務	宅崎 仁芳（総務課長）
経理	熊谷 省吾（経理課長）
調査	谷内尾 晋司（所長） 湯尻 修平（調査部長） 西野 秀和（調査第2課長）
担当	安 英樹（調査第2課調査専門員） 立原 秀明（調査第2課調査専門員） 安中 哲徳（調査第2課主任事主） 山下 陽介（調査第2課嘱託調査員）

②作業経過

調査部調査第2課が主管し、平成19年11月7日～平成20年1月21日に700㎡の発掘調査を実施した。平成19年8月24日に北西部土地区画整理組合、県文化財課、(財)石川県埋蔵文化財センターの各担当者が、北西部土地区画整理組合事務所および二日市イシバチ遺跡現地において事前打合せを実施した。調査は11月7日から開始、11月14日から作業員を投入し遺構検出作業に着手。12月27日に遺構を完掘し、12月28日に空中写真測量を実施、平成20年1月21日調査を完了した。

(平成20年度)

①調査体制

調査期間	平成20年10月14日～同年12月19日
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）
総括	黒崎 宰作（専務理事）
事務	栗山 正文（事務局長）
総務	釜親 利雄（総務GL）
調査	湯尻 修平（所長） 三浦 純夫（調査部長） 伊藤 雅文（県関係調査GL）
担当	立原 秀明（県関係調査グループ専門員） 中泉 絵美子（県関係調査グループ嘱託調査員）

②作業経過

平成20年度は、調査部県関係調査グループが主管し、平成20年10月14日～同年12月19日に1,150㎡の発掘調査を実施した。4月23日、現地において県土木部河川課安原・高橋川工事事務所、野々市町都市計画課、県文化財課、(財)石川県埋蔵文化財センターの各担当者が事前打ち合わせを実施した。また、9月4日、現地において県文化財課と(財)石川県埋蔵文化財センターの担当者が事前打ち合わせを実施した。10月14日から表土除去を開始し、10月27日に遺構検出を終え、以後遺構掘削に着手。12月3日に空中写真測量を実施。以後補足調査と調査区埋め戻しを行い、12月19日に調査を完了した。

第3節 整理等作業の経過

・出土品整理

平成21年度に調査部特定事業調査グループが担当した。

整理期間	平成21年10月21日～同年10月29日
整理主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明）
総 括	黒崎 幸作（専務理事）
事 務	栗山 正文（事務局長）
総 務	釜親 利雄（総務GL）
整 理	湯尻 修平（所長） 米澤 義光（特定事業調査GL）
担 当	立原 秀明（県関係調査グループ専門員） 安中 哲徳（国関係調査グループ主任主事）

・報告書作成

平成22年度に調査部特定事業調査グループが担当した。作成は米澤義光（特定事業調査GL）が行った。

・報告書刊行

平成23年度に調査部特定事業調査グループが担当した。



第1図 調査区位置図 (S=1/5,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

二日市イシバチ遺跡は、平成19年度調査区が野々市市北西部土地区画整理事業21街区1番、平成20年度調査区は同65街区2番地内に所在する。野々市市は旧野々市町が平成23年11月11日に市制移行した県内第11番目の市である。石川県のほぼ中央部に位置し、北東部は金沢市、西南部は白山市と接している。手取川扇状地の北東扇状部から扇端部の南北6.7km、東西4.5km、面積13.56km²の市域を有し、近年は市の南北地区で土地区画整理事業が進展、都市計画道路などの整備が進み、平成22年10月の国政調査で人口5万人を超えるなど、市街地が拡大している。

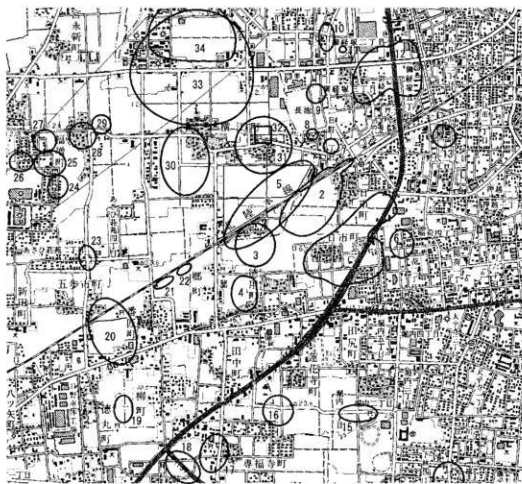
市域は、手取川扇状地の北東部に位置する平坦地形であるが、縄文時代から古墳時代にかけて手取川から派生した小河川が蛇行北流していた。小河川が洪水と氾濫を繰り返し、その結果南北に島状微高地が形成され、遺跡はその微高地上に形成されている。



第2図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

二日市イシバチ遺跡の周囲には縄文時代から中近世までの遺跡が分布する。縄文時代の主要遺跡には御経塚遺跡が存在する。縄文時代後・晩期の大集落跡で竪穴建物、環状木柱列、多量の土器や石器が出土している。弥生時代では後期になり周囲に集落が増加してくる。本遺跡も含め三日市ヒガシタンボ遺跡、二日市イシバチ遺跡、徳用クヤダ遺跡、郷クボタ遺跡、五歩市遺跡などが存在する。古墳時代に入ると遺跡数は激減するが、野々市市教育委員会が調査した二日市イシバチ遺跡地区で7基の方墳が、御経塚シンデン遺跡でも15基の前方後方墳・方墳からなる前期古墳群が確認されている。奈良・平安時代になると手取川扇状地扇状部で政治勢力を背景とした新規開発が始まる。その一つに7世紀第三四半世紀に建立された末松庵寺が存在する。8世紀には横江荘遺跡が存在する。横江荘遺跡では8世紀第3四半期～10世紀中頃の東大寺領であった時期の掘立柱建物や欄など管理施設と考えられる遺構が検出されているが、近年新たに遺跡東側で回廊状大型区画施設等が検出され注目されている。近接して10世紀代の集落遺跡で瓦塔が出土し公的施設の存在が指摘されている徳用クヤダ遺跡や、古代北陸道と考えられる道路状遺構が検出された三日市A遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡が存在する。このほか古代では、三納アラムヤ遺跡、粟田遺跡、下新庄アラチ遺跡、上林新住遺跡などが存在する。中世では扇状地開発に乗り出した在地武士の林氏と富樫氏が台頭し、林氏は野々市市域南部から鶴来地区、富樫氏は野々市市東部から伏見川を地盤とするも、承久の乱（1221）後は富樫氏が台頭し建武2年（1335）富樫高家が加賀国守護職に任ぜられ、富樫館跡を構えた。中世の遺跡には二日市イシバチ遺跡以外に扇が丘ゴシヨ遺跡、三納ニシヨサ遺跡等が存在する。



第3図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

番号	県道路番号	遺跡名	種別	時代	番号	県道路番号	遺跡名	種別	時代
1		三日市A遺跡	集落	弥生、古代、中世	17	08046	専福寺遺跡	寺瓦跡	中世
2	16024	二日市イシバチ遺跡	集落	弥生、古墳、中世	18	08045	乾遺跡	集落	縄文~近世
3		郷ノボタ遺跡	集落	古代、中世	19		徳丸ジョウジャ遺跡	集落	弥生~古代
4		能州タケダ遺跡	集落	古代、中世	20	08111	五多市遺跡	集落	弥生~近世
5	08141	横江D遺跡	集落	弥生、古代、中世	21		香河遺跡	集落	古代、中世
6		三日市ヒゴシタンゴ遺跡	集落	弥生、古代、中世	22		香河藤田遺跡	集落	古代、中世
7	16025	長池キタバシ遺跡	集落	縄文、古代	23	08112	あさひ荘遺跡	散布地	古代
8	16026	長池ニシタンゴ遺跡	集落	縄文、弥生、中世、近世	24	08118	宮水市塚田遺跡	散布地	古代
9	16032	御経塚オキツ遺跡	集落	弥生	25	08120	宮水ほじ川遺跡	館跡、墓池	中世
10	16030	御経塚シナンゴ遺跡	集落	縄文~古墳、中世	26	08119	宮水壱塚遺跡	散布地	縄文
11	16031	御経塚シナンゴ古墳群	古墳	古墳	27	08115	福増東川遺跡	散布地	不詳
12	16027	御経塚経塚	経塚	不詳	28	08114	塚上市左門館跡	館跡	不詳
13	16033	御経塚遺跡	集落	縄文、弥生、古代、中世	29	08113	福増遺跡	散布地	縄文、弥生
14	16034	野代遺跡	散布地	縄文	30	08140	横江C遺跡	散布地	古墳
15	16033	三林館跡	館跡	戦国	31	08139	横江B遺跡	散布地	縄文、弥生
16	08048	田中ノダ遺跡	集落	弥生、古墳	32	08137	横江館跡	館跡	中世
					33	08138	横江A遺跡	散布地	縄文、弥生、古墳、古代
					34	08135	横江荘遺跡	石園	古代

第1表 周辺の遺跡一覧表

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

二日市イシバチ遺跡の調査は、平成19・20年度に行われた。平成19年度調査区は、北陸本線沿いの調査区1とそこから南西に約80m離れた調査区2からなる。平成20年度調査区は、平成19年度調査区2北東側隣接地である。両年度の調査で検出された遺構は以下、竪穴建物：S I、掘立柱建物：S B、溝：S D、土坑：S K、小穴：Pの記号で示した。

第2節 基本土層

調査区における基本土層は、1層が耕作土の灰色細土で厚さ約0.20m、2層も耕作土の黄褐色細砂土で厚さ約0.15m、3層が黒色細砂土の遺物包含層で厚さが約0.20m、4層が灰色細砂土の漸位層で厚さ約0.10mあり、その下に地山の黄色細砂土となっている。

第3節 検出遺構と遺物

1. 平成19年度調査区の検出遺構

調査区1

SK5 楕円形の土坑で竪穴建物の可能性がある。長径2.80m、短径2.13m、深さ0.45mを測る。底面の壁際に幅・深さ約0.08mの壁溝が巡り長辺両端底面に1つずつ柱穴ともみられる小穴が存在する。覆土の殆どが2層の黄褐色粘質土であり、SK5は2層で一気に埋められた可能性が高い。ここから第12図1、2の弥生時代後期の土器が出土している。

SD10 溝北壁は攪乱されているが幅約1.80m、深さ約0.50m程度を測る。ここから第12図4～17の遺物が出土している。4は弥生時代後期の土器で混入品であろう。5以降がこの溝に伴う遺物と推定される。5は珠洲焼片口鉢で内面に10条のおろし目が残る。16、17は加賀甕大甕で、口縁直下肩部に縦1本のヘラ印が残る。実測図形態が異なるが同一個体の可能性大である。肩部には緑色自然釉がかかる。土師器皿10点は大型品から小型品まで存在するがヨコナデ調整と指頭圧痕で成形されている。

P22 SK5の北東側に存在するU字型を呈する不整形なピットで、幅は0.40m、深さは0.08mを測る。第12図3の弥生時代後期の土器が出土している。

調査区2

SI1 調査区西端で竪穴建物の半分が検出された。形態的には隅円方形で一辺約4mと推定される。壁高は約0.30mで、壁際に壁溝が残る。床面に主柱穴が2つ検出され、P4は径0.55m×0.40m、深さ約0.40mを測り、覆土堆積状況から柱の太さが約0.30mと推定される。覆土や床面から第13図18～第14図36の弥生時代後期の土器が出土し、壁溝から砥石と管玉も出土している。

SD1 調査区西側で検出され、長さ約12m分確認した。溝西側では北側壁が二段に掘り下げられている。幅は0.50mから1mを測り、覆土は3層確認された。

SD2 SD1に切れ、円弧状に掘られている。幅は最大で0.85m、最小で約0.40m、深さ約0.20mを測る。覆土は暗褐色土（しまりややなし、鉄分やや含む）である。この溝から第15図54の弥生時代後期の土器が出土している。

2. 平成20年度調査区の検出遺構

SI2 調査区北東端で検出された。隅円長方形の形状で長辺5.87m、短辺4.1m、深さ約0.2m程度を測る。床面は二度貼床し、床面上層断面図からすると、最初に大まかに掘削して床面を均一化するため約7～8cm程度の厚さに土を入れて床面を造成し、その面から柱穴を掘削している。その上の貼床や覆土中から第14図37～第15図50の弥生時代後期後半の遺物が出土している。

SB1 調査区中央部に存在している。方位はN-43°-Eで、桁行3間（P1～4間は2.15m～2.30m、P5～8間は2.10m～2.20m）、梁間1間（P1～5とP4～8間は3.55m）+南東側に庇1間（間0.85m）が付いている。本遺跡の継続時期からみると中世の所産であろうか。

SK1 三角形の形態の土坑で、規模は1.50m×1m、深さ約0.40mを測る。底部はすり鉢状で小穴が複数存在する。覆土から第15図51～53の弥生時代後期の土器が出土している。

SK2 SD7とSD8交差点に存在する。楕円形で長径1.5m、短径1.28m、深さ約1mを測る円筒形土坑である。覆土は土層が8層堆積している。出土遺物がなく時期は不明である。

SD3 調査区南西側で検出され調査区外へ延びている。幅約1.65m、深さ0.25mを測る。第15図55の打製石斧と56の縄文時代後期中葉の土器が出土している。

SD4 SI1の北壁と調査区北端の間に長さ4m部分存在した。幅約0.85m前後で、深さ0.15mを測る。出土遺物はなく時期は不明である。

SD6 調査区の西壁中央部に存在し調査区外へ延びている。幅0.77m、深さは0.13～0.15mで、最深部では0.20mを測る。出土遺物はなく時期は不明である。

SD7 調査区中央部北に存在する。南東から北西方向に約17m分確認した。幅0.38～0.75m、深さ約0.10～0.20mを測り、底面には凹凸がある。第15図57の弥生時代後期後半の土器が出土している。

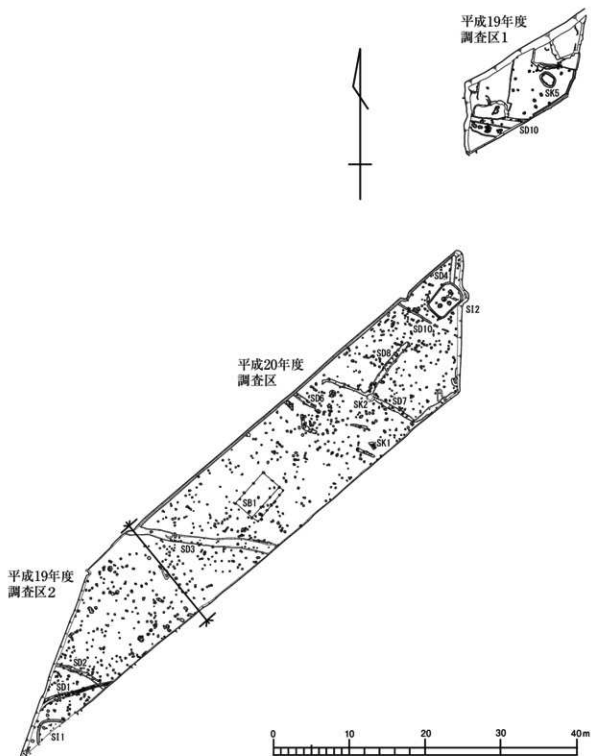
SD8 SD7中間部分から北東方向へ約11m分確認した。幅約0.95m前後で、深さは最深部で0.28mを測る。ここから第16図58の弥生時代後期後半の土器と59の打製石斧が出土している。

SD10 SI2南側の南東から北西方向に延び、幅0.30m、深さ0.22mを測る。出土遺物はなく時期は不明である。

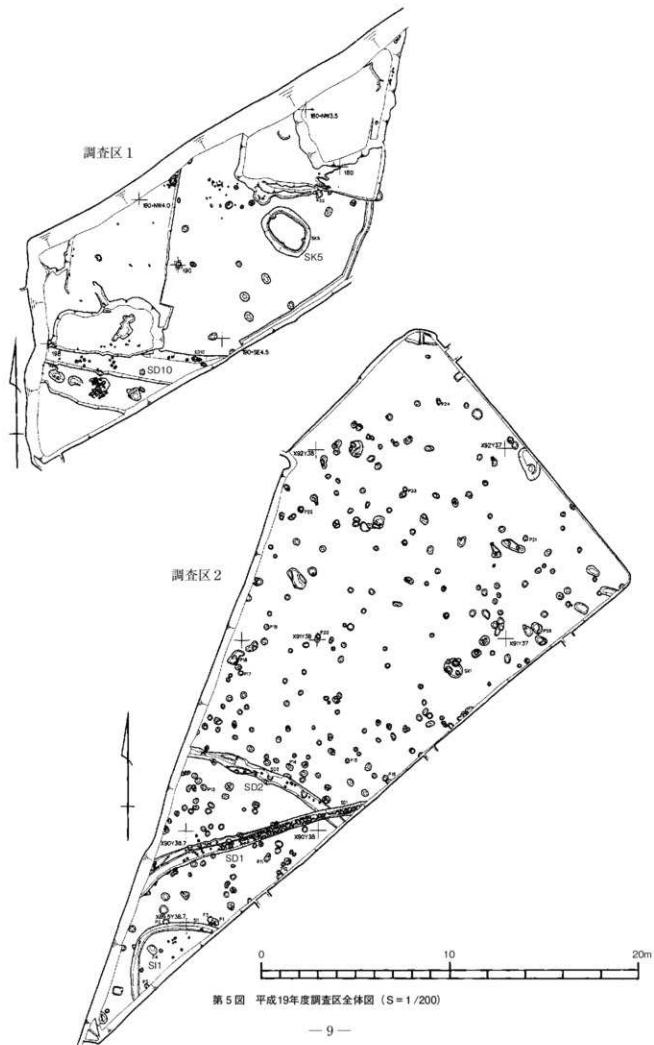
P8 調査区中央部に存在する楕円形小穴である。径0.50m×0.24m、深さ0.68mを測る。出土遺物は第16図63の弥生時代後期後半の土器が出土している。

P14 調査区東側でSD10の南側に存在する。楕円形の穴で径0.32m×0.24m、深さ0.24mを測る。

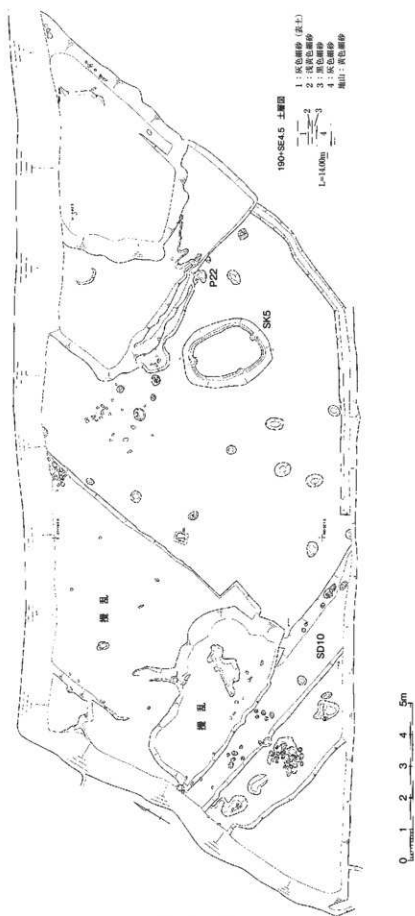
P19 調査区東側で東側壁際に存在する。径0.43m×0.40m、深さ0.58mを測る。楕円形の形態で調査区外へ延びている。P14とP19からは第16図64の弥生時代後期後半の土器が出土している。



第4図 平成19・20年度調査合成図 (S = 1/500)

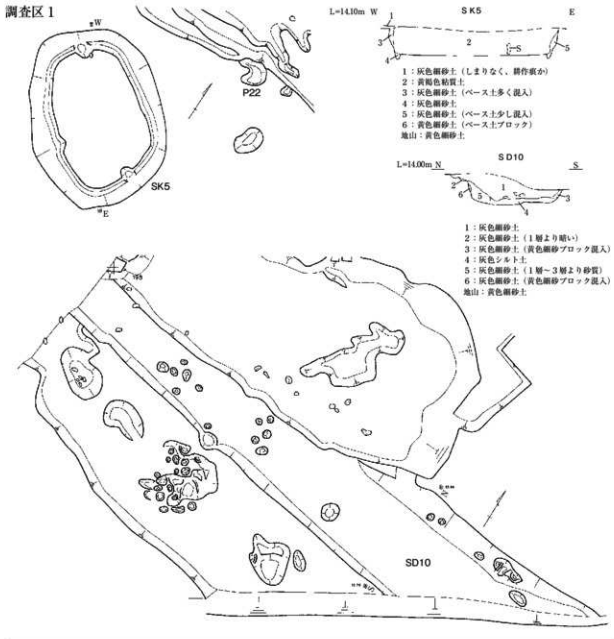


第5図 平成19年度調査区全体図 (S=1/200)

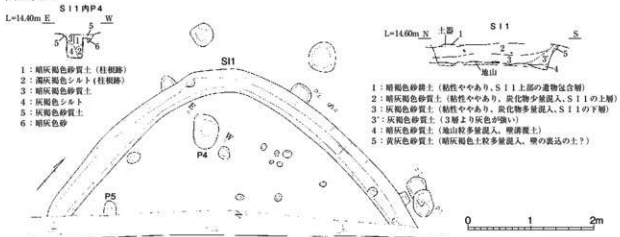


第6図 平成19年度調査区1全体図 (S=1/120)

調査区 1



調査区 2



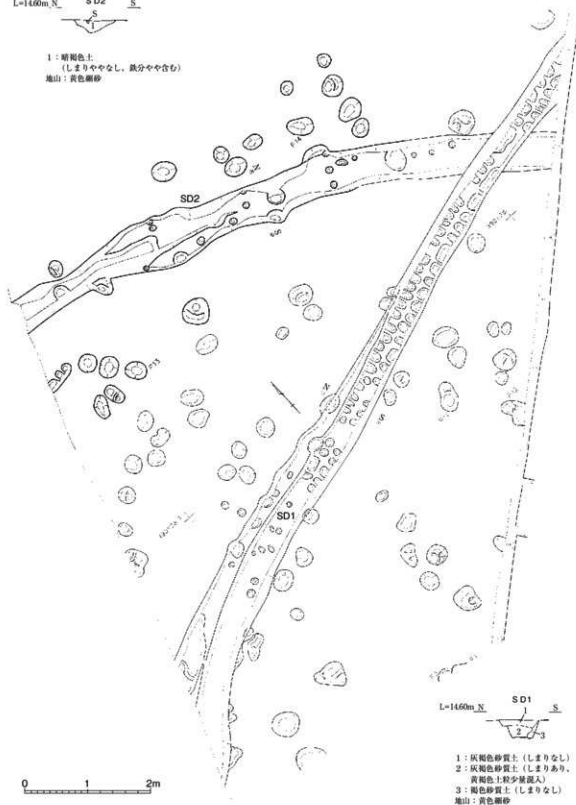
第7図 平成19年度調査区遺構図1 (S=1/60)

調査区 2

L=1460m N S



1: 褐色土
(しまりややなし、鉄分やや含む)
地山: 黄色砂

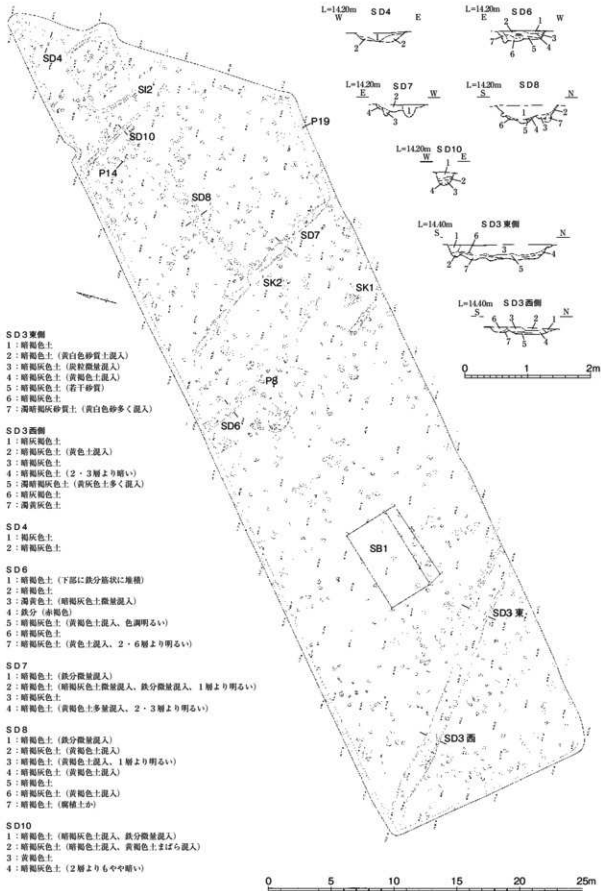


L=1460m N S

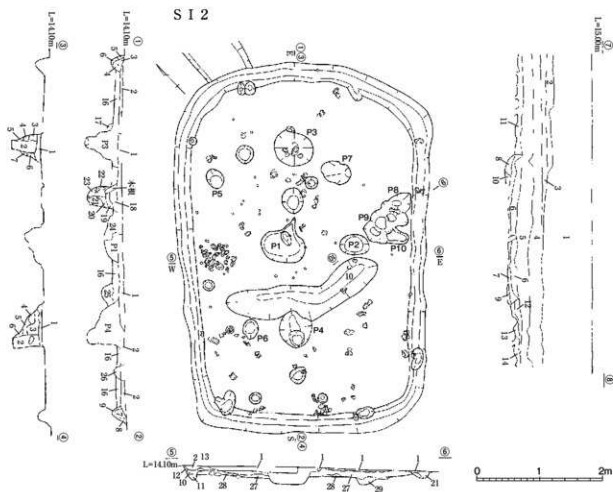


1: 灰褐色砂質土 (しまりなし)
2: 灰褐色砂質土 (しまりあり,
黄褐色土粒少量混入)
3: 褐色砂質土 (しまりなし)
地山: 黄色砂

第8図 平成19年度調査区遺構図2 (S=1/60)



第9図 平成20年度調査区全体図 (S=1/300)・満土层図 (S=1/60)



S 12 ①-④、⑥-⑧

- 1 : 暗褐色土 (若干粘りあり)
- 2 : 暗褐色土 (少し砂っぽい)
- 3 : 暗褐色土 (2層より砂気多し)
- 4 : 暗褐色土 (3層より明るい)
- 5 : 黄褐色土 (暗褐色土混入)
- 6 : 褐色砂質土
- 7 : 暗褐色砂質土
- 8 : 暗褐色砂質土
- 9 : 褐色砂質土 (黄色土ブロック少量混入)
- 10 : 暗褐色粘質土
- 11 : 褐色砂質土 (炭粒少量含む)
- 12 : 褐色砂質土 (黄色土混入)
- 13 : 褐色砂質土 (黄色土混入)
- 14 : 暗褐色砂質土 (黄色土微量混入)
- 15 : 暗褐色砂質土 (黄色土混入)
- 16 : 黄色灰褐色土 (暗褐色土混入)
- 17 : 暗褐色土
- 18 : 暗褐色土 (黄色灰褐色土混入)
- 19 : 灰褐色土
- 20 : 灰褐色土 (19層より暗い)
- 21 : 暗褐色土 (炭粒混入)
- 22 : 褐色土 (黄色土混入)
- 23 : 褐色土 (22層より暗く、黄色土混入)
- 24 : 黄灰色土 (硬くしまる、暗褐色土混入)
- 25 : 黄色土 (粘質)
- 26 : 暗褐色土 (最善のピットか)
- 27 : 黄灰色土 (硬くしまる)
- 28 : 黄灰色土 (暗褐色土混入)
- 29 : 黄色土 (粘質、25層と同じ)
- 地山 : 黄色土 (粘らない)

S 12 ③-④

- P 4
- 1 : 暗褐色土
 - 2 : 暗灰色土
 - 3 : 暗灰色土
 - 4 : 灰黄色土 (4層より暗い)
 - 5 : 灰黄色土 (4層より暗い)
 - 6 : 暗灰色土
 - 7 : 暗褐色土 (6層より暗い)

S 12 東側調査区東壁土層の⑧

- 1 : 耕作土と暗褐色土
- 2 : 暗褐色土
- 3 : 暗褐色土
- 4 : 暗灰色土 (3層より暗い)
- 5 : 暗褐色土 (少し灰色がかかる、遺物を含む)
- 6 : 暗褐色土 (5層より砂気がある、S 12の覆土)
- 7 : 暗褐色粘質土 (S 12の覆土)
- 8 : 暗褐色粘質土 (6・7層より暗い、砂気があり、暗褐色土)
- 9 : 暗褐色粘質土 (砂気があるが少し粘り気がある、暗褐色土)
- 10 : 暗褐色粘質土 (粘床か)
- 11 : 暗褐色土 (砂気がある)

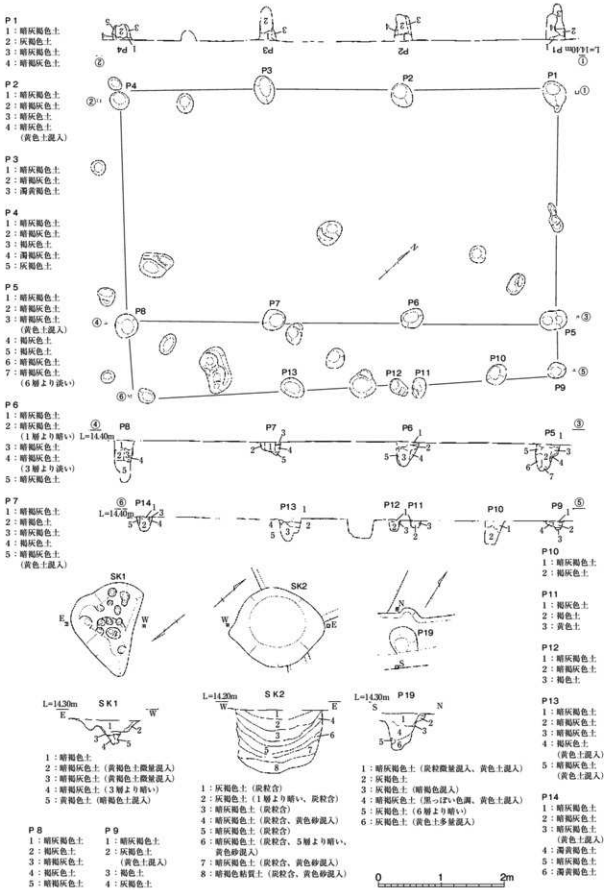
L=1400m



S 12 P 2・8・9⑧-⑩

- 1 : 暗褐色土
- 2 : 暗褐色土 (黄色土混入)
- 3 : 褐色土 (暗褐色土混入)
- 4 : 高粘暗褐色土 (黄色土混入)
- 5 : 暗褐色土 (炭粒含む、黄色土微量混入)
- 6 : 暗褐色土 (黄色土混入)
- 7 : 暗褐色土
- 8 : 薄黄色土 (暗褐色土混入)
- 9 : 暗褐色土 (黄灰色土混入)

第10図 平成20年度調査区聖穴建物遺構図 (S = 1/60)



第11図 平成20年度調査区掘立柱建物・土坑等実測図 (S=1/60)

3. 出土遺物

調査では第12図から第17図の縄文時代から中世の遺物が出土している。出土遺物の個々の特徴は観察表に記載した。以下、出土遺物のうち特徴的なものを説明する。

第12図1～2は平成19年度S K 5から出土した。1は口縁部をヨコナデで面を形成し、頸部外面に粘土の接合痕が残り、外面にはススも付着している。2は口縁部を欠くが、頸部下に櫛歯状工具で刻みを加えている。胎土の赤色粒（シャーマット）が目立つ。

第12図3は平成19年度P22出土の甕口縁部である。口縁内外面はヨコナデ調整をし、内面はヘラケズリしている。第12図4～17は平成19年度S D10出土である。4は弥生時代後期の甕である。5は推定口径34.5cmを測る珠洲焼の片口鉢で、内面に10本単位のおろし目が残る。6～15が土師器皿である。6の口径11.9cmの皿から15の口径7cm程度の小型品まで存在している。16、17は加賀焼の大甕で、図上では2個体になっているが、本来は1個体で割れ口での接合箇所がなく2個体に分かれているが、口縁部の形状から14世紀前半頃（鎌倉時代末～室町時代・南北朝時代前半頃）のものと推定される。珠洲焼や土師器皿も同時期のものと推定される。

第13図18～32と第14図33～36は平成19年度調査区S I 1出土品である。18と19は床面出土であり、18は口縁部ヨコナデ調整の甕、19は口縁部に5条の擬凹線を持つ壺である。甕と壺の器種に違いがあるが、擬凹線を持つものと持たないものに分かれる。20～23は床面直上出土品である。21と22は同一個体の壺で、口縁部はヨコナデ調整をしている。20は壺口縁部で外面が赤彩されている。23は高坏口縁部で内外面が赤彩されている。24～31は覆土下層の出土品である。甕と高坏の口縁部である。甕29のほかは口縁部に擬凹線が巡らされる。口縁部は斜めに立ち上がり先端部を丸くおさめている。32～34は覆土上層出土品である。32は口縁部擬凹線の引き方はごこちなく曲がっている。33は覆土上層出土で他の甕と口縁部の形態と調整法が異なる。それは擬凹線を巡らすのは同じであるが口縁部内面に指頭圧痕があり、口縁先端が先細り気味に立ち上がっていることである。この特徴は弥生時代終末期の月形式土器の甕に認められるものであり、33は月形式土器の甕である。覆土上層から出土していることから他の口縁部形態の土器と時期差が考えられる。35・36は壁溝出土である。35は石質が泥岩と推定される砥石で、側面に母石から切り離した時に加えたノミの痕跡が残る。上下左右の四面の中では、側面が使用のため一番滑らかな状態になっているが、砥石表面には全体に茶色の鉄分状（サビ）が付着している。36は管玉である。

第14図37～45、第15図46～50は、平成20年度調査区S I 2出土品である。37、38、39、42、45の土器は床面や床面ビット内から出土している。この堅穴建物でも出土した甕には口縁部に擬凹線を巡らす38、40～42とそうでない39が出土しており、両者が存在することがS I 1と共通する。ただし擬凹線の引き方が月形式土器のような直線的にシャープに引かれるものと比べるとごこちなく、その特徴からも出土した土器群が月形式土器以前の段階のものと推定される。またS I 2では、S I 1と比べると高坏類の数量が少なく、かわって小型無台鉢が2点（44・45）出土し、うち1点（45）は内外面共に赤彩されている違いが認められる。また46～49の磨石や敲石を兼ねた磨石等も出土しており、弥生時代後期にも磨石類の石器が用いられている。50は管玉石材の緑色凝灰岩割片であり、このS I 2周辺で管玉製作がなされていたことが推定される。

第15図51～53は、平成20年度S K 1出土品である。51と52は小型甕で、口縁部をヨコナデ調整するものと2条の擬凹線を巡らすものが存在する。53は裝飾器台の破片でS字状スタンプ文と櫛歯状で刻みを入れている。

第15図54は、平成19年度S D 2出土品である。口縁部に9条の細い擬凹線が巡らされている。

第15図55～71は平成20年度調査区出土である。

第15図55、56はS D 3出土品である。55は6条の弧線が巡っているが、縄文時代後期中葉加曾利B式系土器の注口土器か鉢胴部で、焼成が堅緻である。56は打製石斧で刃部両面と側縁が使用により摩耗している。

第15図57はS D 7出土品である。口縁部に8条の擬凹線が巡らされているが、擬凹線は浅い。

第16図58、59はS D 8出土品である。58は口縁部に6条の擬凹線が巡らされているが、これも擬凹線は浅い。59は打製石斧で刃部を欠いているが、側縁部は刃潰しを加えている。

第16図60はP 1出土品である。打製石斧の完形品で、刃部は使用により表面が摩耗している。

第16図61はP 3出土の壺の口縁部である。口縁部が幅広く7条の浅い沈線が巡らされている。

第16図62はP 7出土品である。高坏脚部で、表面はヘラナデされ、孔は4個と推定される。

第16図63はP 14出土品である。甕の口縁部に細い5条の擬凹線が巡らされている。

第16図64はP 19出土品である。甕の口縁部に浅い7条の擬凹線が巡らされている。

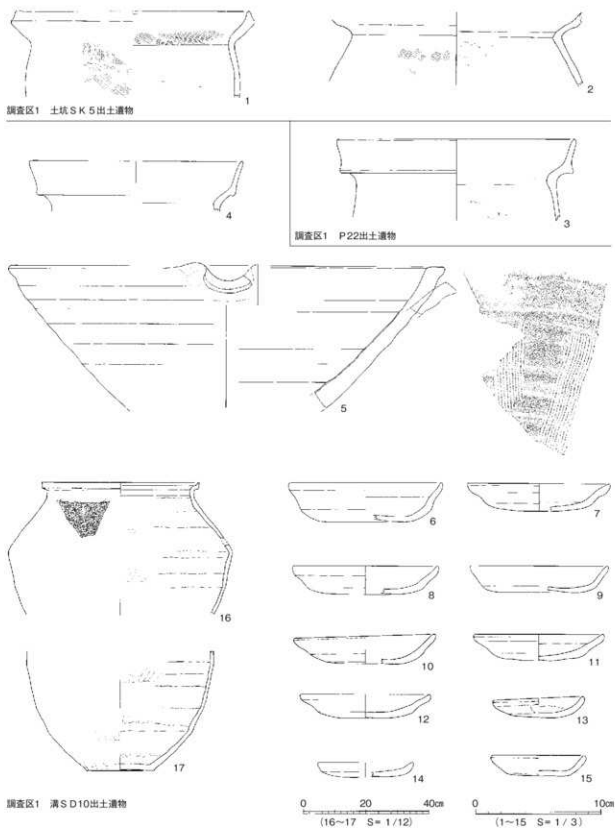
第16図65はP 23出土品である。有台鉢で内外面共に指ナデ調整やハケナデ調整をしている。

第16図66はP 24出土品である。楕円形をした軽石で、片面に三条の筋が残り、砥石として用いている。裏面には円錐形の孔が掘られている。

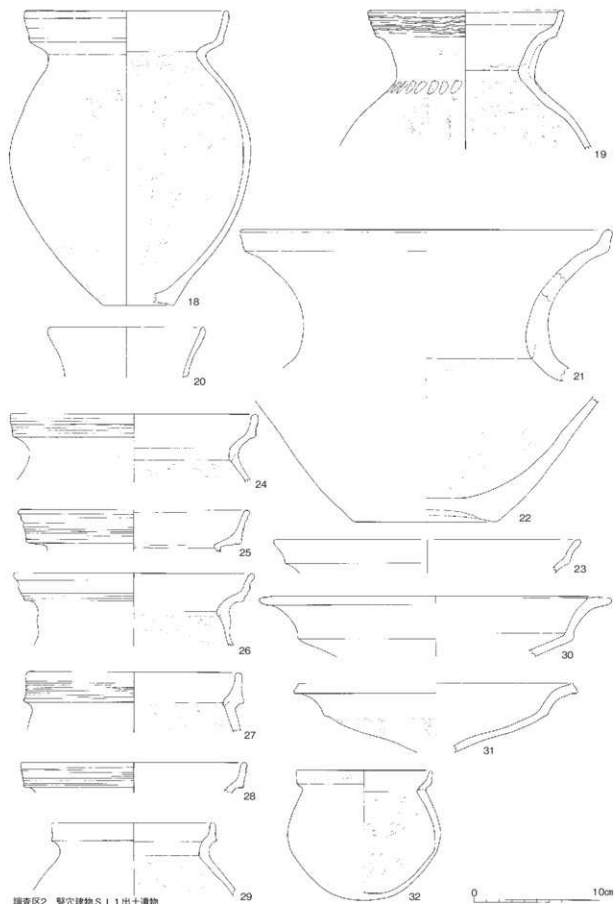
第16図67は遺構検出時に出土したものである。4単位の小波状口縁を呈する深鉢口縁部内面端部を肥厚させ2個1対の孔を縦に穿ち、この間を長楕円形に沈線を引き中にLRの斜縄文を施文している。縄文時代後期前葉末～中葉の東海系深鉢である。

第16図68～70、第17図71は調査区東壁からの出土品である。68は口縁部内面端部が肥厚する古墳時代前期の布留式土器系の甕である。69も口縁部内面端部が少し窪んでいる。70は壺で胴部が球形をしている。71は口縁部下端に稜線を持つ山陰系の甕である。この68と71は調査区東壁出土の土器であるが、時期的には堅穴建物や土坑、小穴出土の弥生時代後期後半の土器群よりも新しい古墳時代前期頃の土器であり、時期差が存在している。

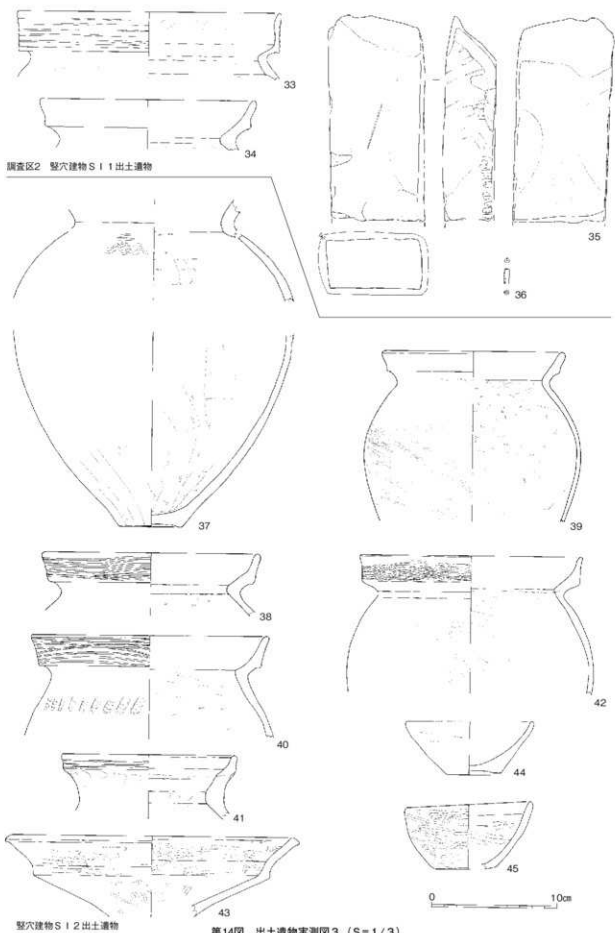
出土土器について胎土からみると、一般的には砂粒を含んでいるが、砂粒以外に赤色粒（シャーマット）を含むものや海綿骨針を含むものも存在している。平成19年度調査区1出土の土器器皿には、胎土中に赤色粒が含まれている。



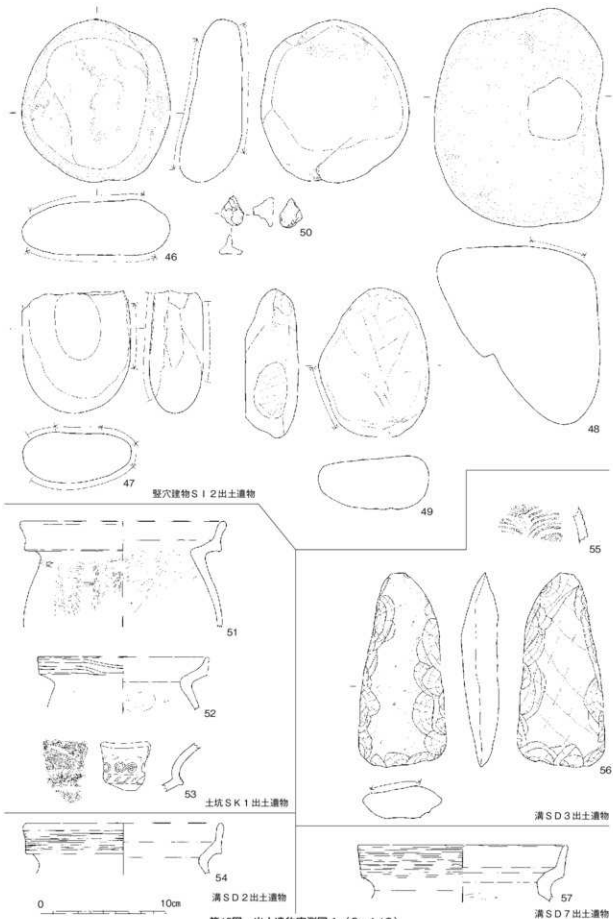
第12図 出土遺物実測図1 (S=1/3、16・17：S=1/12)



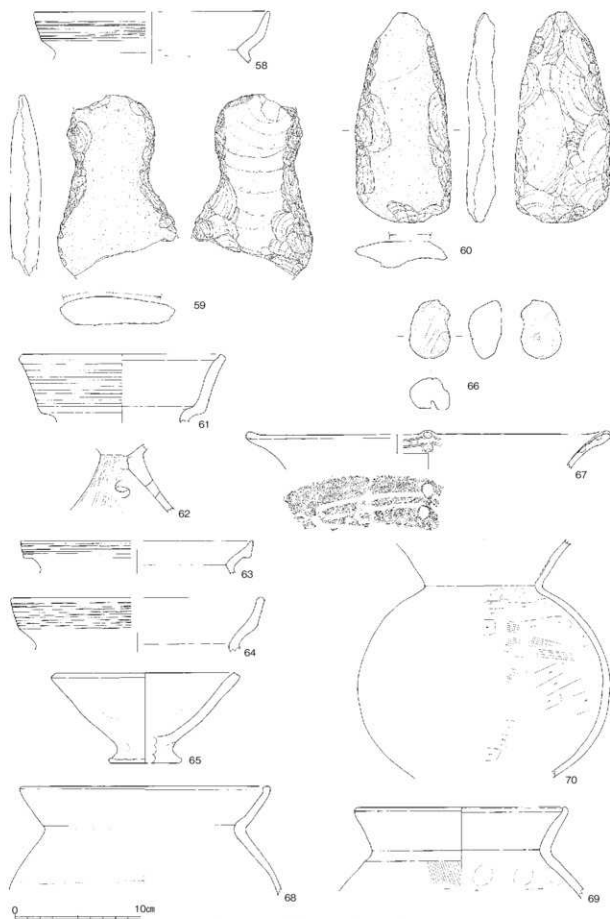
第13図 出土遺物実測図2 (S=1/3)



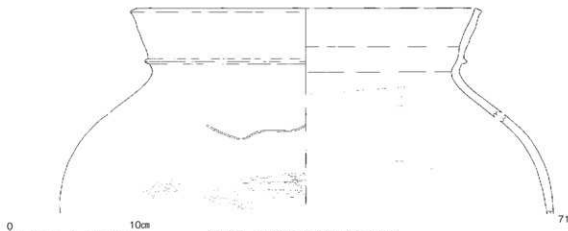
第14図 出土遺物実測図3 (S=1/3)



第15図 出土遺物実測図4 (S=1/3)



第16図 出土遺物実測図5 (S=1/3)



第17図 出土遺物実測図6 (S=1/3)

第4章 総 括

今回の調査区においては、遺跡が、縄文時代後期中葉、弥生時代後期後半（法仏式～月影式期）、中世の3時期に形成されていたことが判明した。調査成果を簡潔にまとめた。

縄文時代

二日市イシバチ遺跡で一番古いのが縄文時代後期前葉末から中葉の第15図55、第16図67の土器である。僅か2点の土器片であるが、この時期に近い土器群は、押野大塚遺跡、御経塚シンデン遺跡等から出土している。67は口縁部内面施文の東海系土器群で、胴部が球形に張る特徴を持つ深鉢である。また、打製石斧が3点出土しており、近隣に縄文時代後期の集落が存在することが推測される。

弥生時代～古墳時代初頭

①**出土土器** 竪穴建物S11、S12や土坑SK1等から、弥生時代後期後半の土器群が出土した。また遺物包含層から少量の古墳時代前期初頭頃の土器群が出土している。まず、S11は完掘していないが、甕、壺、高坏、小型甕等が出土している。床面や覆土下層から出土している甕と壺は口縁部形状が有段口縁で、口縁部外面に擬凹線を持つが、口縁部外面の擬凹線も太いものと細いものが存在する一方で、ヨコナデ調整のものも同時存在している。口縁部もやや斜めぎみながら立ち上がり、先端は丸みを持ち先端も細くならず外反もしていない。そのことから口縁部先端が外反し器壁が薄くなり、口縁部内面に指頭瓦痕が存在する「月影式土器」以前の時期のものと推定される。S11の上層には、第14図33の「月影式土器」甕に該当する破片が1点だけ出土し、主体土器群は月影式以前の法仏Ⅱ式土器である。

②**竪穴建物の分布** 竪穴建物が密集せずまばらに分布することから、竪穴建物が散居村的にまばらに存在する集落であると推測される。

③**管玉製作** S11からは緑色凝灰岩製の管玉や四角柱型の砥石が出土しており、集落内で管玉製作を行っていたことが推測される。ただしS11内においては緑色凝灰岩の剥片が確認されていないことから、調査区外の別地点で製作していた可能性もある。

中世 平成19年度調査区溝SD10から珠洲焼片口鉢、加賀焼大甕、土師器皿が出土した。加賀焼大甕口縁部形態等からこの遺物群は14世紀前半頃の所産と推定される。また、平成20年度調査区SB1も当期の所産の可能性はある。

二日市イシバチ遺跡の発掘調査からは以上のようなことが判明した。

No	年次	自治地区	自治地区点	種別	設備	口径	水深	高さ	色調 (円)	色調 (円)	塗	調内	調外	備考	図記号	
1	H19	5-09E区	S83.7.ア	衛生土貯	要	184			黒灰	黒灰	真	ナテ, ハケム	ヨコナテ, ナテ		H7	
2	H19	5-09E区	S83.5.ア	衛生土貯	要				黒灰	黒灰	真	ヨコナテ, ナテ	ヨコナテ, ナテ, 斜行覆板文, ハケム		C.8	
3	H19	5-09E区	922	衛生土貯	要	186			黒灰	黒灰	真	ヨコナテ, ナテ	ヨコナテ, ナテ		C.9	
4	H19	5-20E区	S010	衛生土貯	要	168			黒	黒	真	浄水のたまり型(不明)	浄水のたまり型(不明)		C.20	
5	H19	5-09E区	S030	調整	片口鉄	345			灰	灰	真	ヨコナテ, ナテ	ヨコナテ, ナテ		D.2	
6	H19	5-20E区	S030	中継土貯	面	119	6.6	3.1	黒灰	黒灰	真	ヨコナテ, ナテ	ヨコナテ, ナテ		D.10	
7	H19	5-20E区	S010	中継土貯	面	112	6.6	2.2	黒灰	黒灰	真	ヨコナテ, ナテ	ヨコナテ, ナテ		D.7	
8	H19	5-20E区	S010	中継土貯	面	114	8.2	2.2	黒灰	黒灰	真	ヨコナテ, ナテ	ヨコナテ, ナテ		D.13	
9	H19	5-20E区	S030	中継土貯	面	105	7.6	2.1	黒灰	黒灰	真	浄水のたまり型(不明)	浄水のたまり型(不明)		D.19	
10	H19	5-20E区	S010	中継土貯	面	111	6.6	2.1	黒灰	黒灰	真	ヨコナテ, ナテ, 節理圧入	ヨコナテ, ナテ		D.5	
11	H19	5-20E区	S010	中継土貯	面	102	6.2	2.1	黒灰	黒灰	真	ヨコナテ, ナテ	ヨコナテ, ナテ		D.6	
12	H19	5-20E区	S010	中継土貯	面	102.8	11.0	1.9	黒灰	黒灰	真	ナテ	ナテ		D.12	
13	H19	5-20E区	S010	中継土貯	面	7.05	1.8		黒灰	黒灰	真	ヨコナテ, ナテ	ヨコナテ, ナテ		D.8	
14	H19	5-20E区	S010	中継土貯	面	7.11	0.70	1.2	黒灰	黒灰	真	ナテ(覆板, 灰, V)	ナテ(覆板, 灰, V)		D.11	
15	H19	5-20E区	S010	中継土貯	面	7.2	4.9	1.7	黒灰	黒灰	真	ヨコナテ	ヨコナテ		D.4	
16	H19	5-20E区	S010	調整	要	50.0	21.8		自然土	自然土	真	ヨコナテ, 節理	ヨコナテ		D.3	
17	H19	5-20E区	S010	調整	要	30.0	21.8		自然土	自然土	真	ヨコナテ, 節理	ナテ		D.3	
18	H19	X89738	S11E	衛生土貯	要	16	16.2	3.6	23.4	黒灰	黒灰	真	ヨコナテ, ハケ, ケズ	ヨコナテ, ハケ		C.4
19	H19	X89738	S11	イ排水	要	15.4			黒	黒	真	ヨコナテ, ナテ, ケズ	縦長ナテ		C.3	
20	H19	X89738	S11	イ排水	要	12.2			黒	黒	真	浄水で不明	上ケ		H20 C.22	
21	H19	X89738	S11	イ排水	要	20	11.2		灰	灰	真	ケズ	浄水で不明		C.36	
22	H19	X89738	S11	イ排水	要	26.0	11.2		灰	灰	真	ケズ	浄水で不明		C.35	
23	H19	X89738	S11	イ排水	要	34.2			黒	黒	真	ヨコナテ	ヨコナテ		H20 C.19	
24	H19	X89738	S11	イ排水	要	19.6			黒	黒	真	ヨコナテ, ケズ	赤黒銅板, ヨコナテ, ハケ		H20 C.11	
25	H19	X89738	S11	イ排水	要	18.0			黒	黒	真	ヨコナテ, ケズ	赤黒銅板, ヨコナテ		H20 C.14	
26	H19	X89738	S11	イ排水	要	16.0			灰	灰	真	ヨコナテ, ナテ, ケズ	赤黒銅板, ヨコナテ		H20 C.13	
27	H19	X89738	S11	イ排水	要	16.6			黒	黒	真	ヨコナテ, ケズ	赤黒銅板, ヨコナテ		H20 C.21	
28	H19	X89738	S11	イ排水	要	17.8			灰	灰	真	ヨコナテ	赤黒銅板, ヨコナテ		H20 C.17	
29	H19	X89738	S11	イ排水	要	12.8			灰	灰	真	ヨコナテ, ケズ	ヨコナテ		H20 C.16	
30	H19	X89738	S11	イ排水	要	26.0			灰	灰	真	管	ヨコナテ, ハケ		H20 C.12	
31	H19	X89738	S11	イ排水	要	21.6			黒	黒	真	ヨコナテ	ヨコナテ, ハケ		C.2	
32	H19	X89738	S11	イ排水	要	10.3			灰	灰	真	ヨコナテ	ヨコナテ		C.1	
33	H19	X89738	S11	イ排水	要	20.8			灰	灰	真	ヨコナテ, ケズ	赤黒銅板, ヨコナテ, ハケ		H20 C.20	
34	H19	X89738	S11	イ排水	要	17.0			黒	黒	真	ヨコナテ, ケズ	ヨコナテ		H20 C.15	
35	H19	X89738	S11	イ排水	要				灰	灰	真	石質	石質		H1	
36	H19	X89738	S11	イ排水	要				灰	灰	真	石質	石質		H2	
37	H20		S1.2	イ排水	要				黒	黒	真	ヨコナテ, ケズ	黒銅板		C.11	

第2表 出土物観察表 1

No.	年代	出土地区	出土地点	種類	器種	口径	底径	器高	色調	色澤	形状	調色(%)	調紋(%)	備考	同化%
38	H20	S12	P2	土器	甕	18.0			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ナギ、ケズリ	5条縦四條、ヨコナガ		C-25
39	H20	S12	P9	土器	甕	14.2			灰褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、一部ハナナズリ	ヨコナガ、ナギ、ハナナズリ		C-16
40	H20	S12		土器	甕	18.6			赤褐色	赤褐色	甕	強いヨコナガ、ケズリ	4条縦四條、強いヨコナガ	甕面加工用の斜行文あり	C-13
41	H20	S12		土器	甕	13.6			赤褐色	赤褐色	甕	ケズリ、ハナナ、器面付着 ウツギ形跡	4条縦四條、ヨコナガ、口縁下層下にハナナ		C-10
42	H20	S12	P21	土器	甕	17.5			灰褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、一部ハナナズリ	12条縦一横四條、部分の縦四條、部分のハナナズリ		C-12
43	H20	S12	壺	土器	高杯	22.2	4.3		赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ	ヨコナガ	14.5cm、厚さ1.3cm、重さ545.27g、甕面に 横線に滑面あり	C-15
44	H20	S12		土器	無口鉢	9.5	3.0		赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ	ヨコナガ	11.5cm、厚さ1.6cm、重さ327.44g、 甕面に滑面あり	C-14
45	H20	S12	瓦面	土器	無口鉢	9.8	4.8	5.1	赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ	ヨコナガ	11.5cm、厚さ1.6cm、重さ327.44g、 甕面に滑面あり	C-15
46	H20	S12	P1	土器	石製品				灰褐色	赤褐色	甕	石質	石質	12.4cm、厚さ1.6cm、重さ327.44g、 甕面に滑面あり	C-16
47	H20	S12	石1	土器	石製品				灰褐色	赤褐色	甕	石質	石質	12.4cm、厚さ1.6cm、重さ327.44g、 甕面に滑面あり	C-16
48	H20	S12	P3	土器	石製品				灰褐色	赤褐色	甕	石質	石質	12.4cm、厚さ1.6cm、重さ327.44g、 甕面に滑面あり	C-16
49	H20	S12	P4	土器	石製品				灰褐色	赤褐色	甕	石質	石質	12.4cm、厚さ1.6cm、重さ327.44g、 甕面に滑面あり	C-16
50	H20	S12		土器	石製品				灰褐色	赤褐色	甕	石質	石質	12.4cm、厚さ1.6cm、重さ327.44g、 甕面に滑面あり	C-16
51	H20	S81		土器	小甕	16.0			灰褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ナギ、ケズリ	ヨコナガ、ナギ		C-8
52	H20	S81		土器	小甕	13.4			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ケズリ、器面付着	5条縦四條、ヨコナガ、ナギ、ナギ		C-23
53	H20	S81		土器	波部器				赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ	ヨコナガ		C-9
54	H19	X00738	S12	土器	甕	13.4			明褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ケズリ	強い8条縦四條、ヨコナガ		D20
55	H20	S13		土器	甕				明褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ	強い8条縦四條、ヨコナガ		D-2
56	H20	S10		土器	打製石斧				灰白色	赤褐色	甕	石質	石質	15.4cm、幅7.6cm、厚さ2.8cm、重さ358.42g、刃部 両面に割込線あり	C-6
57	H20	S17		土器	甕	16.5			灰白色	赤褐色	甕	ヨコナガ	ヨコナガ		C-6
58	H20	S18		土器	甕	18.6			灰褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ケズリ	5条縦四條、ヨコナガ		C-7
59	H20	S18		土器	打製石斧				灰褐色	赤褐色	甕	石質	石質	14.4cm、幅9.5cm、厚さ2.45cm、重さ203.87g、刃部 欠	C-9
60	H20	P1		土器	打製石斧				赤褐色	赤褐色	甕	石質	石質	16.6cm、幅7.6cm、厚さ2.8cm、重さ352.92g、刃部磨光	C-2
61	H20	P3		土器	打製石斧	15.8			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ナギ	強い8条縦四條、ヨコナガ		C-18
62	H20	P7		土器	高杯				赤褐色	赤褐色	甕	ハナナズリ	ハナナズリ		C-16
63	H20	P14		土器	甕	18.3			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ	強い8条縦四條、ヨコナガ		D20
64	H20	P19		土器	甕	19.6			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ	強い8条縦四條、ヨコナガ		D20
65	H20	P23		土器	有口鉢	14.1	5.6	7.2	赤褐色	赤褐色	甕	ナギ、ハナナズリ	ナギ、ハナナズリ、器面付着		C-5
66	H20	P24		土器	甕				赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ	ヨコナガ		C-11
67	H20	瓦面		土器	甕	28.5			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ	ヨコナガ		C-22
68	H20	壺		土器	甕	19.6			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ケズリ	ナギ、ハナナズリ		D-1
69	H20	壺		土器	甕	16.5			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ケズリ、器面付着	ナギ、ハナナズリ		C-22
70	H20	壺		土器	甕	16.5			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ケズリ	ナギ		C-21
71	H20	壺		土器	甕	26.0			赤褐色	赤褐色	甕	ヨコナガ、ナギ、一部ナギ	ヨコナガ、ナギ、ハナナズリ、ハナナズリ		C-20

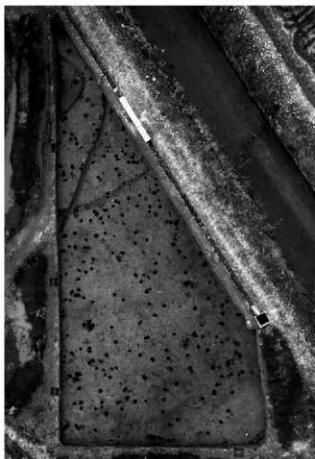
第3表 出土文物観察表 2



調査区遠景（西から）



調査区透景 (南東から)



調査区 2 完掘状況 (俯瞰)



調査区 2 完掘状況 (南西から)



調査区 1 土坑SK5完掘状況 (北東から)



調査区1 溝S D10完掘状況 (西から)



調査区1 溝S D10完掘状況 (東から)



調査区2 竪穴建物S I 1完掘状況 (西から)



調査区2 竪穴建物S I 1 P4土層



調査区2 竪穴建物S I 1遺物出土状況 (東から)



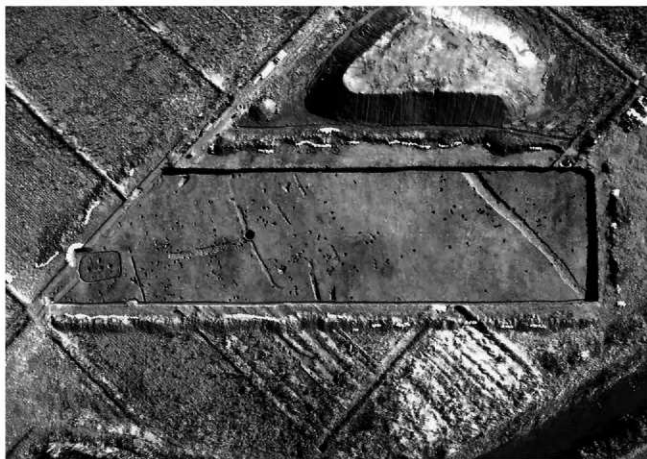
調査区2 竪穴建物S I 1遺物出土状況 (南から)



平成19年度調査区2 溝SD1 完掘状況 (東から)



平成19年度調査区2 溝SD2 完掘状況 (南東から)



平成20年度調査区 完掘状況 (俯瞰)



遺構検出作業



調査区西側遺構検出状況(東から)



遺構掘削作業



竪穴建物S12掘削作業



竪穴建物S12完掘状況(俯瞰)



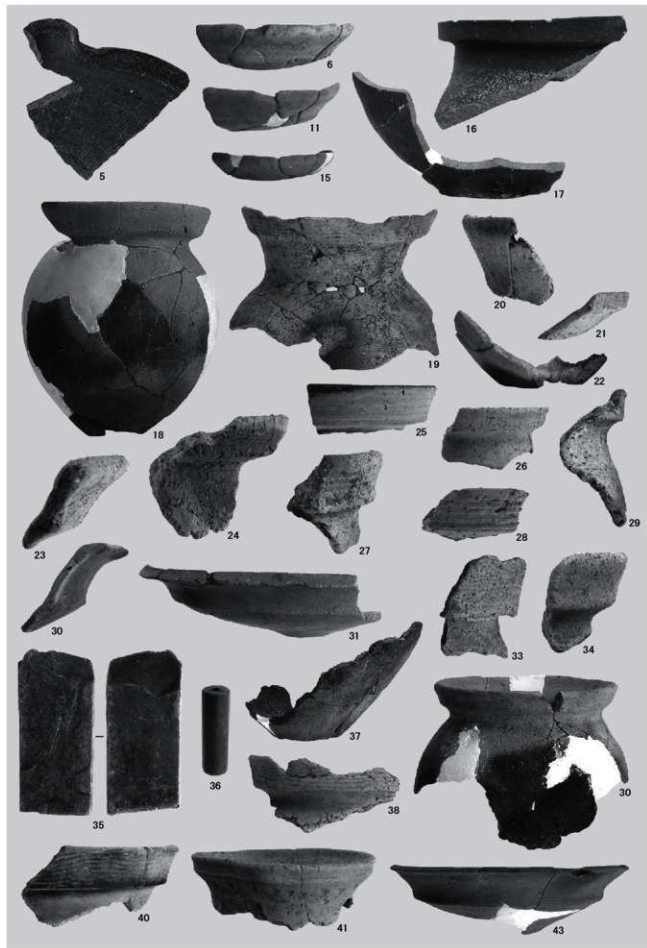
土坑SK1完掘状況(北から)

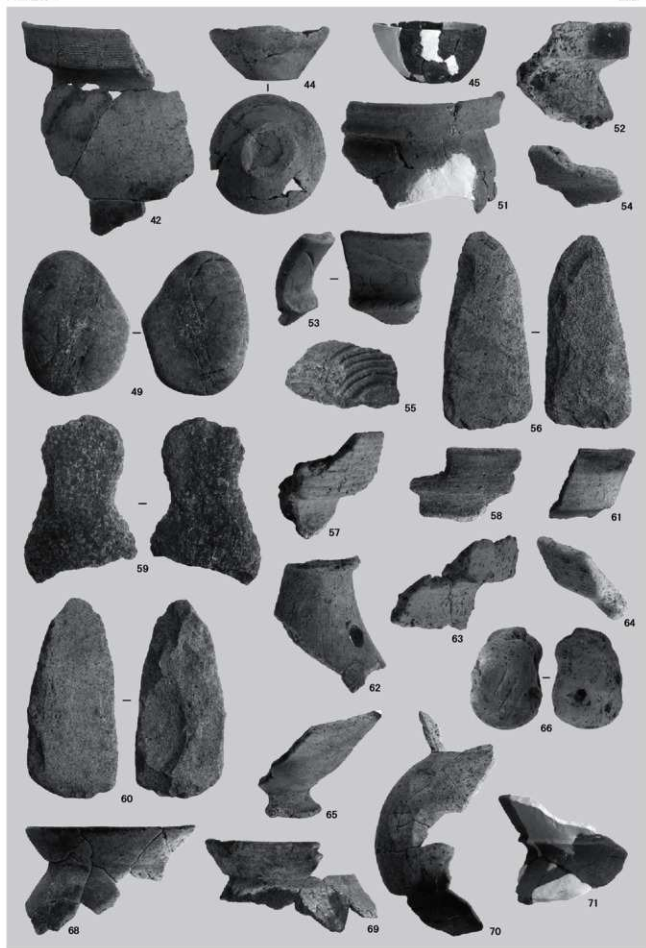


土坑SK2完掘状況(南から)



SD3完掘状況(東から)





報告書抄録

ふりがな	ののいちし ふつかいちしばちいせき							
書名	野々市市 二日市イシバチ遺跡							
副書名	二級河川安原川広域河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	米澤義光							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477 FAX076-229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2012年3月30日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	発掘期間	発掘 面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ふりがな 二日市イシバチ 遺跡	石川県 野々市市 二日市町	17212	-	36度 32分 20秒	136度 35分 35秒	20071107 ～ 20080121 20081014 ～ 20081219	700㎡ 1,150㎡	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
二日市イシバチ 遺跡	集落	縄文時代後期、 弥生時代後期、 中世	竪穴建物、掘立柱 建物、土坑、溝、 小穴	縄文土器、弥生土 器、中世土師器皿、 珠洲焼、加賀焼、 打製石斧、管玉、 砥石				
要 約	<p>平成19・20年度の2カ年にわたり発掘調査を実施した。調査区は二日市イシバチ遺跡の南西部域にあたり、縄文時代後期中葉、弥生時代後期後葉、中世の遺構や遺物を確認した。縄文時代後期中葉の土器は僅かであるが、この遺跡最古の遺物である。弥生時代後期後葉では竪穴建物、土坑を検出した。竪穴建物が疎らに存在することから当地区では、散居村的に建物が分布していたことが推測される。また、平成19年度調査の竪穴建物S I 1からは管玉や砥石が出土しており管玉製作のあったことが推測されるが、剥片が認められないことから集落内の別地点での製作の可能性もある。平成19年度調査区Iでは中世の掘立柱建物、溝などを確認した。珠洲焼すり鉢、加賀焼大甕、土師器皿が出土し、加賀焼大甕の口縁部の特徴から14世紀前半頃のものとして推定される。</p>							

野々市市 二日市イシバチ遺跡

発行日 平成24（2012）年3月30日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

電話 076-225-1842（文化財課）

財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibunor.jp

印刷 宮下印刷株式会社

